

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2021年3月24日 (Vol.164)

「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句一其ノ四 二川（愛知県）から四日市（三重県）まで」

「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句一其ノ四 二川（愛知県）から四日市（三重県）まで」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido42_Kuwana.jpg

東海道五拾三次之内 四拾貳番目 桑名 七里渡口

歌川広重『東海道五拾三次』の四回目です。

今回は二川から四日市まで紹介します。

前半は陸路ですが、後半に東海道五拾三次のうち二つ目の海路の「七里の渡し」があります。

この海上ルートはすでに鎌倉・室町時代から利用されていて、古くから東西を結ぶ重要な交通インフラでした。

航路は外回りと内回りの2通りあり、満潮の時は陸に近い内回りのコースを、干潮の時は陸から遠い外回りのルートを使ったと記録されています。

この近い内回りの航路（海上七里）が七里でした。

潮の干満によるコースの違い、風の状態に左右され、また干拓などで海岸線が変化するたびに航路も変わってゆき、所要時間は4～7時間を要したようです。

今回は現在の愛知県豊橋から三重県四日市までの旅をお楽しみください。

34. 二川（ふたがわ） 猿ヶ馬場（さるがばば）



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido33_Futagawa.jpg

東海道五拾三次之内 参拾参番目 二川 猿ヶ馬場

副題の猿ヶ馬場は白須賀宿を出て西に行けばすぐのところがありました。猿ヶ馬場とはいうものの、近くに馬場はなく、小松が生えているだけです。言い伝えによれば、豊臣秀吉が小田原攻めの際に二川の茶店で柏の葉で包んだ餅を食べ、勝ち戦（かちいくさ）のあと再び立ち寄り、その餅に「猿が婆の勝和餅」と名付けたといわれています。その後、「猿が婆」が地名の「猿ヶ馬場」に、「勝和餅」が「柏餅」に転じたと伝わっています。構図は画面手前から徐々に高まってゆく上り坂で、反対に背後の小松が生えている丘は下り坂です。丘は画面上端まで続き、空は見えません。背後の丘は見えるものの視線が奥に進むことを拒み、これによって手前の坂を登る三人の瞽女（ごぜ）と呼ばれた盲目の芸人の存在を際立たせています。瞽女は諸国を旅しながら三味線を伴奏に歌を唄うなど芸を披露して生計を立てていました。物見遊山の旅人には感じられないうら寂しさが漂っています。小松だけの丘が画面を覆う風景と瞽女の取り合わせはなかなか妙を得たものです。ただし広重はわびしげな画面の左端に「名物かしは餅」の看板を掲げた茶店を描き、ほっとさせる要素を描き込んでいます。

33.白須賀では私も「柏餅」が季語の句を詠みましたが、ここでも「柏餅」を詠んだ名句を選びました。

生きてゐることに合掌柏餅

村越化石（むらこし かせき）（1922-2014）
季語＜柏餅＞で初夏

35. 吉田 豊川橋



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido34_Yoshida.jpg

東海道五拾三次之内 参拾四番目 吉田 豊川橋

豊川に架かる吉田橋を遠望する図です。

豊川橋は120間(けん)余(約220m)の長さで、瀬田の唐橋(からはし)、岡崎の矢作橋(やはぎばし)とともに「東海道三大橋」の一つです。

手前は吉田城の櫓(やぐら)です。

広重はこの櫓を右端に寄せ、残りの部分を使って川面と空を広々と描いています。

櫓では左官職人が黙々と外壁の塗り直しをしています。

それに対して、足場を組む鳶(とび)らしき職人は足場の頂上に登り、手をかざして橋を渡っていく大名行列の見物としやれこんでいます。

鑑賞するものの視線は彼とともに美しい景色を目にすることになります。

この右端近景に屋根の上で働く職人を配置した構図は、葛飾北斎の『富嶽三十六景』のシリーズに影響を受けたものと考えられています。

ここでは近景の松と城に注目し句を選びました。

春風や城あらはるる松の上

正岡子規(まさおか しき) (1867-1902)

季語<春風>で三春

36. 御油（ごゆ） 旅人留女（たびびととめおんな）



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido35_Goyu.jpg

東海道五拾三次之内 参拾五番目 御油 旅人留女

夕暮れ時のにぎやかな御油宿を遠近法を駆使して描いています。
 街道の両側には旅籠（はたご）が軒を並べ、夕方ともなると客引き合戦が激しさを見せ、留女がなんとか旅人を自分の旅籠に引っ張り込もうとしています。
 とりわけ御油宿は隣の赤阪宿と近かったため留女は強引であったようです。
 顔の見える旅人は荷物を引っ張られて苦しそうです。
 もう一人の男も腕をつかまれ、強引な客引きに、笠に隠れてはいますが渋い顔が透けて見えそうです。
 対照的に右側の若い女性は口元に笑みを浮かべて通り過ぎてゆきます。
 右の旅籠では、すでに武士が草鞋（わらじ）を解いて、女性の差し出すたらいの水で足を洗おうとしています。
 右の壁に講中札（こうちゅうふだ）が掛かっています。
 これはNo.6「戸塚」でもありましたが、講の定宿のしるしとして、講の名前が書いてあります。
 右端は半分くらいしか見えませんが、日本橋を除いて35番目の宿場を表す「三拾五番」、次いで「東海道続画（つづきが）」。
 次に「彫工治郎兵エ（ちょうこうじろうべえ）」「摺師平兵衛（すりしへいべえ）」と彫師（ほりし）と摺師の名を、そして「一立斎図（いちりゅうさいず）」と広重の号を記し、後方の円看板には「竹之内板」とあります。
 これは保永堂の版元であり、徹底した商業的になっています。
 ここでは「出女（でおんな）」とも呼ばれた旅籠の客引きの女性を詠んだ句を選びました。

出女の出がはり時や木瓜の花（木瓜の花＝ぼけのはな）

福田甲子雄（ふくだ きねお）（1927-2005）
 季語＜木瓜の花＞で晩春

37. 赤阪 旅舎招婦の図 (りよしゃしょうふのず)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido36_Akasaka.jpg

東海道五拾三次之内 参拾六番目 赤阪 旅舎招婦の図

室内描写に的を絞った図です。

舞台は夕飯どきの旅籠で庭と屋根に墨のぼかしが施され、夜の暗さを表しています。

逆に墨のぼかしにはさまれた室内は明るく浮き立って描かれています。

中庭には蘇鉄（そてつ）が植えられています。

この蘇鉄を境に左右の部屋でそれぞれに展開する小さなドラマを描き出しています。

左の部屋では男の客が煙火を吸いながら寝転がり、そこへ旅籠の女が膳を運んできています。

その隣では按摩（あんま）がひと揉（も）みいかがでしようかのご用伺いに来ています。

廊下にいる片肌脱ぎの男は、夕飯前にひと風呂浴びたという風情です。

奥には階段を降りてくる客の脚が描かれ、旅籠に二階があることを示しています。

右の部屋では女たちが鏡に向かって化粧をしています。

彼女たちは副題にもある「招婦」とも「飯盛女（めしもりおんな）」とも呼ばれ、客の夜の相手もする私娼（ししょう）でもありました。

室内には赤と青の布団が積み重ねられ、ここが布団部屋であることを示しています。

客がくつろぐ左の部屋が旅籠の表の顔とするなら、こちらは裏の顔といえます。

ここでは娼婦を詠んだ句を選びました。

娼婦またよきか熟れたる柿食うぶ

鈴木しづ子(すずき しづこ) (1919-没年不詳)

季語<柿>で晩秋

38. 藤川 棒鼻ノ図 (ぼうばなのず)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige38_fujikawa.jpg

東海道五拾三次之内 参拾七番目 藤川 棒鼻ノ図

棒鼻というのは街道の境界を示す場所で棒鼻から内側が宿場で外側が街道です。この藤川の図には中央に棒鼻を示す標示杭が描かれています。折りしも、かしこまったようすの行列が棒鼻にさしかかったところです。二人の役人と思われる男は笠を脱ぎ、旅人も頭を下げお迎えしています。行列の馬の背には御幣（ごへい）が立てられています。これは毎年八月朔日（一日）に江戸幕府から京都の朝廷に馬を献納する行事です。八朔御馬進献（はっさくおうましんけん）と呼ばれ、東海道では武士たちが隊列を組み、馬に御幣を立てておごそかな行進を行いました。広重は天保三年にこの一行に加わって、その体験を活かして『保永堂版』を描いたとみられています。東海道を旅し、各地の宿場などを取材したことはのちの彼の作画傾向を方向づけた大きな旅であったといえますが、全行程を同行したかどうかは分かっていません。画面はおごさかさを漂わせるものですが、左端に戯れる子犬を描き込むことで緊張感をほぐしています。八朔とは旧暦八月一日のことで、稲の豊作を祝い、かつ祈る日。また、徳川家康がはじめて江戸城に入った日とされ、諸大名や旗本たちは将軍に祝詞を述べました。ここでは八朔と犬を詠みこんだ句を選びました。

八朔や犬の腕にも小豆飯（小豆飯＝あずきめし）

小林一茶（こばやし いっさ）（1763-1828）

季語＜八朔＞で仲秋

39. 岡崎 矢矧（やはぎ）之橋



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige39_okazaki.jpg

東海道五拾三次之内 参拾八番目 岡崎 矢矧之橋

矢作（やはぎ）川の西岸から対岸の岡崎城を望む構図です。

矢作（矢矧）橋は江戸時代、東海道中最長の208間（約374m）の橋として知られていました。広重は画面の横幅いっぱい橋を描き、橋の長さをわかりやすく示しています。

『保永堂版』の東海道五拾三次は基本的には、江戸側から京都側を見る視点で描かれています。しかしこの図では橋の上の大名行列が江戸を目指している珍しいとらえ方をしています。

江戸時代には、岡崎は徳川家康の生誕地として重視され、幕府とゆかりの深い譜代大名が藩主を務めていました。

矢作川を渡った左手には、岡崎城が描かれています。

橋と城、そして大名行列という取り合わせは、岡崎を描く際の定型とされていたようです。

岡崎城の周囲には宿場が広がり、画面中央から左手には葦（あし）が生い茂った河原が続いています。

『保永堂版』にしばしば大名行列が登場しますが、その場合人物は小さく描かれています。

ここでも人物は豆粒のようですが、持ち物の種類によって腰を曲げていたり伸ばしていたりと、一人一人をていねいに描き出しています。

また、川の水面のぼかしは川の広さや深さを見事に表現しています。

ここでは川沿いに生い茂った銀色の葦に注目し句を選びました。

青天に河辺の芦の枯葉かな

加藤暁台（かとう きょうたい）（1732-1792）

季語＜枯芦＞で三冬

40. 池鯉鮒 (ちりゅう) 首夏馬市 (しゅかうまいち)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido39_Chiryu.jpg

東海道五拾三次之内 参拾九番目 池鯉鮒 首夏馬市

「池鯉鮒」とは面白い地名ですが、現在の知立市です。

毎年、「首夏」すなわち陰暦四月二十五日から五月五日にかけて、池鯉鮒では全国から 400 ～ 500 頭の馬が集められ、大規模な馬市が開かれました。

野原には多くの馬が杭（くい）につながられています。

手前の二人と左奥の一人の農夫とみられる男たちは育てた馬を市にかけようと連れてきたところです。

画面まんなか一本の大きな松があり、その下に馬飼（うまかい）や馬喰（ばくろう）が大勢集まって馬の値段を決めたことからこの松を「談合松（だんごうまつ）」といいました。

その集団に向かって弁当売りらしき者が近づいています。

構図は地平線で画面を二分する明快なものです。

この図の魅力は開放感に富んでいるところです。

草原を吹き抜ける風によって草が右になびいていることを示しています。

草原のさわやかな緑色と相まってこの季節ならではの爽やかな空気が描き出されています。

副題の首夏は夏の初めで、初夏と同じ意味です。

ここでは初夏を詠んだ句を選びました。

さきがけて初夏の山草花は黄に

飯田蛇笏(いいた だこつ) (1885-1962)

季語<初夏>で初夏

4 1. 鳴海 名物有松絞（ありまつしぼり）



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido40_Narumi.jpg

東海道五拾三次之内 四拾番目 鳴海 名物有松絞

古くから歌枕になっている「鳴海」の地は、鳴海絞、有松絞の産地として全国に名をはせていました。

鳴海宿の東一里（約 4km）に有松村があり、絹や木綿を藍（あい）、紅（べに）、紫などで絞った布は浴衣や手拭（てぬぐ）いなどに使われ、江戸時代には尾張藩の特産品として保護され、とても人気のある商品でした。

この図はその絞りを売る二軒の店と街道が描かれています。

手前の店では商談の真最中です。

店の番頭とおぼしき男が旅人に絞りを勧めています。

また、この店の暖簾（のれん）には「ヒロ」印と「竹内」「新板」の文字が染め抜かれています。

「ヒロ」は広重の「ヒロ」、「竹内」は版元の竹内孫七を、「新板」は新刊の意味で「東海道五拾三次シリーズ新発売！」と宣伝しています。

街道を行く旅人はすべて女性で、手前の二人は徒歩、次は宿駕籠（やどかご）、最後は馬と、その姿がていねいに描写されています。

これは有松絞、鳴海絞が女性の人気を得ていたことを示しています。

いつの世もファッションに敏感なのは女性です。

ここでは鳴海の里の「絞り」を詠んだ句を選びました。

田植時鳴海の里は絞り干す

鈴木花蓑（すずき はなみの）（1881-1942）

季語＜田植時＞で仲夏

4 2. 宮 熱田神事



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige42_miya.jpg

東海道五拾三次之内 四拾壱番目 宮 熱田神事

宮とは熱田神宮のことで、日本武尊（やまとたけるのみこと）が使った草薙剣（くさなぎのつるぎ）がまつられています。

熱田神宮では毎年五月五日の端午の節句に「馬の塔」という神事が行なわれ、それを描いています。近隣の村人たちが豪華に飾りたてた馬を熱田神宮へ奉納した後に、裸馬に荒薦（あらごも）を乗せた俄馬（にわかうま）を走らせ競うものです。

手前では、揃いの有松絞の赤い半纏（はんてん）を着た男たちが俄馬と一緒に駆けて行っています。馬には跡綱という長い綱が結びつけられています。

画面奥には藍染の半纏を着た一群があり、赤い半纏グループに迫っています。

二つのグループは鋭い三角形をつくり、画面の右から左へスピード感のある矢印のように描かれています。

右手前に大きく描かれた鳥居は「近景拡大構図」が用いられ、対照的に祭りを見る人々は左上に静かなたたずまいで小さく描かれています。

これによって駆けまわる中央の荒くれ男たちの勇壮さと祭りに賭ける心意気をより一層引き立てています。

ここでは競馬（きそいうま）を詠んだ句を選びました。

我恋ふる月毛のきみや競馬（月毛＝つきげ、栃栗毛色の馬のこと）

溝口素丸（みぞぐち そまる）（1713-1795）

季語＜競馬＞で初夏

43. 桑名 七里渡口（しちりのわたしぐち）



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido42_Kuwana.jpg

東海道五拾三次之内 四拾貳番目 桑名 七里渡口（しちりのわたしぐち）

熱田の宮から桑名までは、伊勢湾を行く船旅です。その距離が七里（約 27.5km）であったことから「七里の渡し」と呼ばれました。図は二隻の渡し船が船着場に帆を降ろしたところです。画面右には桑名城が見えます。三方を海に囲まれて扇形につくられていたことから扇城とも呼ばれていました。美しい藍色の海原と橙色の空の中、藍の濃淡と細い線の重なりで波が描かれていますが、河口にしては波がやや荒い感じなのは、渡しの長旅を印象づけるための工夫だと思われます。構図は手前の船の帆柱を中心に展開しています。右手にはランドマークとして桑名城がそびえ、左手には沖に風をはらんだ白い帆船とのびやかな海原が広がっています。広重は No.37「赤阪」でも旅籠の中の対照的な空間を蘇鉄（そてつ）の左右に描き分けました。同じようにここ桑名でも右手には重厚なモチーフである城を、左手には開放的な海原の自然景を対比させています。人物は手前の船で船頭がはちまきを締めなおし、海の旅らしい雰囲気醸し出しています。ここでは桑名名物の焼蛤（やきはまぐり）と帆立舟に連想を飛ばして句を選びました。

帆の立ちしごとく蛤焼かれけり

阿波野青畝（あわの せいほ）（1899-1992）
季語＜蛤＞で三春

4 4 . 四日市 三重川



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido43_Yokkaichi.jpg

東海道五拾三次之内 四拾参番目 四日市 三重川

四日市宿の近くを流れた三重川のほとりを舞台としています。
 四日市の名は、毎月四日、十四日、二十四日と四のつく日に市が立ったことに由来します。
 副題に「三重川」とあり、画面左には屋根や帆柱が見えていることから、三重川の河口付近でしょうか。
 図の中央では柳の木が風によって激しく揺られています。
 画面は左右に分かたれ、橋を渡る旅人は風をはらんで大きくふくらんだ合羽（かっぱ）を押さえながら右手に進んでいます。
 一方、土手では左斜め下に延びる道を、男が風で飛ばされた菅笠（すげがさ）を困り顔でつんのめるように追いかけています。
 広重が描いたのは、登場人物がお互いに背を向けて離れてゆく旅のもの寂しさです。
 柳の枝や蓑も強くなびき、心細さを募らせるような風が重要な役割を果たしています。
 合羽の男が顔を見せないことも、知らぬ者どうしのすれ違いを強調し、わびしい河原の風情となっています。
 俳句の世界で通常は「柳」と「風」といえば「柳に風と受け流し」のように、柳は風に逆らわないことになっています。
 ここでは反骨精神豊かに「柳」と「風」を詠んだ句を選びました。

吹かれつつ柳は発と極を吐き

志賀康(しが やすし) (1944-)
 季語<柳>で晩春

私も宮から桑名までの海路に連想を飛ばして詠んでみました。

たたへあふ風の船旅蜜柑むく（風＝なぎ、蜜柑＝みかん）

白井芳雄
季語＜蜜柑＞で三冬

今回は「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句一其ノ四 二川（愛知県）から四日市（三重県）まで」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：安村敏信・岩崎均史著

『広重と歩こう 東海道五十三次』（小学館）（2000年）
ISBN4-09-607001-7

町田市立国際版画美術館監修・佐々木守俊解説
『謎解き浮世絵叢書
歌川広重 保永堂版 東海道五拾三次』（二玄社）（2010年）
ISBN978-4-544-21201-3

小林忠・前田詩織解説
『歌川広重 東海道五十三次五種競演』（阿部出版）（2017年）
ISBN978-4-872-42443-0

新田時也編著・志田威・中澤麻衣著
『東海道・中山道 旅と暮らし』（静岡新聞社）（2019年）
ISBN978-4-783-81091-9

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』（角川学芸出版）
ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621034-6 C0392

本間美加子
『日本の365日を愛おしむ』（東邦出版）
ISBN978-4-8094-1652-1 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com